たばこは本当の意味での嗜好品「楽しみカットしないで」

私の息抜き ～My Relax～

②志茂田景樹氏

直木賞作家、志茂田景樹氏(75)は常に時代を先取りする生き方を貫いてきた。

1980年に小説「黄色い牙」で直木賞を受賞した後は作家としてだけでなくタレント活動、ファッションモデル、講演などで多忙な毎日を過ごしている。

近年は家庭での童話や絵本の読み聞かせの必要性を痛感したことから「よい子に読み聞かせ隊」を結成。「隊長」としてボランティアメンバーとともに全国で活動を行っている。

カラフルなタイツ姿に紫や緑、青などに染めたド派手な髪は、バラエティー番組を席巻した80～90年代と変わらない。朝方を中心に「最低30分、長くて2時間」というウオーキングを日課とし、健康の維持につなげている。「左右色違いのタイツをはくことは20数年前からやっています。ウオーキングでも、私には袋小路に入り込むクセがあり、決められた道より知らない道を歩く。戻ってきて風呂に入り、朝食。それが気分転換になっています」と明かした。

意語のと当品」氏は「本好田景樹この茂田景ばで志た味る

00年代に入ってからは手書きではなくパソコンで原稿を執筆し、今ではブログやツイッターも自ら更新。来月76回目の誕生日を迎えるとは思えないほどエネルギッシュだ。

吸い過ぎない限り ストレス発散にも

「こうしなければいけないという原理はない。原則を課すことはあるが、そこからはみ出ることもある」。既成の概念から外れることをいとわないから、クリエーティブな仕事が可能なのだ。

そんな志茂田氏は学生時代からの愛煙家。「特に30～40代は1日4箱吸っていた。執筆する時に大きな灰皿があったので、4箱以上だったこともあったかな。学生時代は金魚のようにパクパクと、それから純喫茶などで深く吸うようになって、最初はクラクラしました」と懐かしそうに振り返った。

最近はめっきり喫煙本数は減ったが、今でも飲み会の席などで喫煙者がいると一緒になって吸うという。

「たばこが健康に悪いなんて、誰も証明していない。あまり吸い過ぎない限り、ストレス発散になったり、気分が良くなるのだから、楽しみをカットしない方がいい」と力説。「本当の意味での嗜好(しこう)品。何でもガチガチにするよりニュートラルがいい。遊びがないといけない」。人生を謳歌(おうか)するという自身のモットーを引き合いに出し、分かりやすく説明した。

今後も絵本や児童書の作家として、また、絵描きとして精力的に活動する。「読み聞かせのよさを伝えていきます。好奇心の赴くままに、ですね」と話し、笑みを浮かべた。

＝おわり＝

志茂田景樹（しもだ・かげき） 本名・下田忠男。1940年(昭15)3月25日、静岡県生まれ。都立国立高、中大法学部卒。80年「黄色い牙」で第83回直木賞受賞。小説家、絵本・児童書作家、読み聞かせ隊長。1㍍78、61㌔。血液型A。